
おなかのなか

原木野徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

胎内（前書き）

応募したけれど引っかかりもしなかった駄作。でも思い入れはあるので、もしよければ見てやってください。

胎内

始めがいつだったかなんてあやふや過ぎて覚えていない。生命が創られた時だったのか、脳が形成された時だったのか。よく分からないけれど、よく分からないうちから記憶は蓄積されていた。

初めはただたゆたうだけのもので、それからだんだんとカタチが創られていった。時間の概念などは持たないが、気が遠くなるほどの時を過ごしたように思う。すべての生命の始まりから同じように進化退化していくのだから、当たり前と言えばそうなのかもしれない。

手足から邪魔な水かきが消え、それは前よりも自由にと動き出す。尻の先の尻尾も縮まって元が分からなくなってしまった。

こぷり、こぷり、こぷん。羊水のたゆたう音が身体中に響く。時折母の言葉も、くぐもってではあるが届いていた。意味もなく手足を動かせば、喜ばれたらしい。撫でられた腹から温かみが伝わってくるような気さえた。

ごぷり、と羊水が揺れた。普段はこぷこぷとたゆたうだけのそれが、ごうごうと激流となって流れ出す。その流れに乗せられ、己も子宮外へと押し出されようとしていた。

ぐにゃり、と頭蓋を押しつぶされる。喉も肺も身体中が捻じ潰されるように狭い産道を通り抜ける。骨が軋む。ぎうぎう捻じられる。ごぼりと羊水が溢れ出た。口から、鼻から、絞り取られるように満ちていた水分が抜けていく。乾く。渴く。

ずいぶんとおかしな形になってしまった頭がようやく産道を抜けた。すぐに身体の方もずりと落とされる。ようやく狭苦しい場所を抜けたと肺を開いたら、冷たく乾いた空気に刺された。激痛と言ってもいいその痛みに悲鳴を上げる。悲鳴を聞いた周りの人間たちはそろって息を吐き、安堵したように笑った。己の目からは狂っているようにも見えた。こちらはこんなにも苦しんでいるというのに、

なんと薄情なのだろう。そうは思っても出てくるのは拙くけたたましい叫声だけだ。苦しくなあって息を継ぐが、また走る激痛に喘ぐように声を出す。そのとき、暖かな羊水を意味もなく繰り返し飲み込んでいたのはこの為だったのかと気がついた。だが、それとは比べようもないくらい痛い痛みが伴っている。痛い、痛い、苦しい。あの、温かで優しくかった羊水へと戻りたい。ここはあまりにも生きていくには厳しすぎる。

塩分を持った水が瞳を濡らして、ひりひりと痛んだ。塩とはこんなに痛いものなのか。乾いた眼球には刺激が強い。

どうして己は生まれてしまったのだろう。嗚呼、こんな世界になど生まれたくはなかった。己はこれから薄情な人間たちとともに己自身もそうなって、苦痛ばかりがあふれる世界で生きていかなければならないのか。恨む憎む気持ち溢れ出す。なぜ、生まれなければならなかったのか。誰のせいでもない、誰かに向けるわけではない悪念が思考を支配した。あの狭く心地よい羊水の中で一生を過ごせばよかった。広い世界などいらぬ。嗚呼、帰りたい。

固く平らな台の上でもがくだけだった身体を持ち上げられる。冷たく、感情のこもらないうすい皮だった。ぱりぱりと突っ張るような感触のあと、他の何かに渡される。暖かい肉だった。暖かく、柔らかな、確かな愛情のこもった肉に包まれる。これが母の腕か、無意識だけれど理解していた。腹越しでしか聞いたことのない母の声が鮮明に聞こえる。生まれてよかった、そのとき一瞬だけ思った。それほど柔らかく、心地よい空間だった。

「わたしのあかちゃん」

そこで記憶は途切れる。

違和感

生まれた時のことを覚えている、と言ったらおかあさんに頬つぺたをはたかれた。そんなこと言わないで！　って泣きつかれた。赤くなってしまった頬つぺたを何度も撫でて、ごめんね、ごめんねと言いながら。だからあれから僕はそのことについて一度も話していない。話さなかったら忘れてしまった。今では覚えていた、ということ覚えていただけだ。

その次の記憶は、どこに行こうか、というおかあさんの声だ。それは単なるお出かけと言ったものではなくて、どこに住みかえようかという引越しの言葉だった。僕は海の近くがいい、と答えた。理由はよく覚えていないけれど、海というものが見てみたかったのだろう。それから何度か引越しをしたけれど、いつも海の近くだった。近くというだけでまだ見たことはないけれど。

昔のことを思い出すのにも飽きてしまって、赤く染まりだした窓の外を見る。

季節は冬と言うらしい。夕暮れになるのが早くなったし、冷たい空気が肌を刺している。なんだろう、この感じ。前にもきつとあった。それは別に、一年前のことだとかではなくて。なんだろう。痛い。

窓の向こうでは僕と同じくらいの子供がたくさん歩いていた。みんな背中に身体に見合わない大きな何かを背負っている。

そう言えば、あれを最初に見たとき、あの子たちは何をしているの、僕はしなくていいの、とおかあさんに聞いたら、はたかれたんだ。あなたは賢くて特別な子だから、学校なんて行かなくていいのよって赤くなった頬つぺたをさすられながら言われた。あの子たちはガッコウというところに行って、いまは帰ってくるところらしい。みんな口々にいいばい、またねと言いながら手を振っている。そして、家に入るとただいま、と盛大な声で言うんだ。

ふと、その中の一人と目があつた。笑いながら手を振られる。僕はどうしたらいいのか分からなくて、じっとその子を見ていた。その子は手を振るのに飽きると、ヘンナノ、と口をとがらせて一つの家に入ってしまった。ただいま。また聞こえた。

タダイマってどういう意味なんだろう。僕はどこから帰ってきただことがないし、おかあさんもそんな言葉言ったことがない。僕が家から出る時は決まって他のどこかへ住み替えるときだけだから。

ガッコウに行ってる子は知ってるのに僕は知らない。カシコイって何なんだろう。教えてくれないから分からない。タダイマ、と呟いてみようとしたけれど、なんだか使っちゃいけないような気がして口を閉じた。

ふわり、と潮の匂いが風と共に入り込んだ。この窓から海は見えないけれど、近くにあるらしい。おかあさんは優しい。だって、僕のお願い聞いてくれるんだもの。海の匂いを胸いっぱい吸い込む心地良い。満たされた気分になる。

こぶん。耳の奥で響く音。これもいつものことだ。こぶん、こぶん。懐かしい響き。きつとこれは音なんかではなくて、ただ響いてるだけなんだ。耳の、頭の、脳の中のずっと奥で。忘れてしまいうなどこかで。

「かえりたい」

気づけば呟いていた。またやってしまった。昔からある欲求。どこに帰りたいのか、何を望んでいるのか分からないまま溢れ出す。帰りたい。

おかあさんに聞かれたらまたはたかれてしまう。変なこと言わないで！　って泣かれてしまう。おかあさんの泣いてる顔は好きじゃない。だから、ぼくはヘンなことは言わないようにしてる。

ああ、海はどんな色をしているのだろう。どんな温度なのだろう。行きたい。ちがう。じゃあなに。

ふすまの向こうの扉が開く音がした。この部屋と外の世界をつなぐ境界線を越えて、おかあさんが帰ってきたんだ。

「帰ったわよ」

すぐに声が聞こえた。おかあさん、と呟いて、こんなときなんて言ったらいいのかわからなくなる。何か言わなきゃいけない気がするけれど、それが何なのかわからない。いつものことだ。

「おかあさん」

呼んだら、おかあさんは僕を抱きしめてくれた。一人で大丈夫だった？ と聞かれた。いつもいつも同じ言葉で聞いてくるけれど、僕にはおかあさんが何を言っているのかよく分かっていない。だから言葉を繰り返す。ダイジョウブ。そうしたら必ずおかあさんは変わらない暖かい手で僕を撫でてくれるんだ。

「あなたはとてもいい子ね。すぐにご飯を作るからね」

おかあさんは僕を離して台所に向かう。手伝ってくれる？ と聞かれたから頷いた。いい子ね。また言われた。

冷蔵庫から卵を出して、と言われたから、僕は四角くて中が冷たいレイゾウコに向かう。

物にはそれぞれナマエというものがあるらしい。これがレイゾウコ。手に持っている丸くてとがった形をしたのがタマゴ。はい、とおかあさんに手渡す。おかあさんはマリってナマエだ。

ナマエというのはモノや人を表すときに使う言葉なんだ。だから僕のナマエはアナタかアンタかオマエ。それ以外のモノで、おかあさんから呼ばれたことはないから、それがナマエなのだと思う。

ご飯がとても暖かだった。喉を滑り落ちていくそれに違和感を感じ

じる。こぶん。帰りたい。

境界線

今日もおかあさんは仕事にいつてしまった。僕はすることがないので家にある本を読みあさる。おかあさんが持って帰ってきたものだから、僕には読めない字や分からない言葉なんかもあったけれど、暇つぶしにはなった。この行為を繰り返すのは、もう数え切れないほどとなるのだけれど。

「うみはおかあさんににってるんだよ」

絵本なら僕にも読める。その中の一つを声に出してみた。海はおかあさんに似てる。これも何度も繰り返した行為。けれどこれだけは、いつまでも新鮮さが抜けなかった。僕の目の前できらきらと輝いて、まるで吸い寄せられるようだった。

窓の下の壁にもたれて、いつまでもその文字を眺める。きらきら、きらきら。こぶん。

「おい！」

窓の外から声がした。僕は最初、それが僕を呼んでいるだなんて思わなくて、ちらと視線を送っただけですぐまた絵本に戻ってしまった。

「おい！　　おい！　お前だよ、お前！」

ナマエを呼ばれてようやく振り向く。窓の外をちゃんと見たら、そこには昨日手を振っていた子が立っていた。声を張り上げて何度も僕を呼ぶ。振り向いた僕に気づいて、やっと向いたよと口を動かした。

「お前、そこでいっつも何してんの？　なあ、遊ばない？」

どうしてこの子は僕の名前を知っているんだろう。目をぱちくりさせながらその子をじつと見る。なんて言ってるんだろう。僕はなんて答えたらいんだろう。アソブって、何。

「なんか答えろよ！」

「え、あの、アソブって、なに？」

「はあ？」

言われたとおりに答えたら変な顔をされてしまった。その子は頭を掻いて何事かを呟く。たぶんあー、とかうーとか、意味のないものだろう。

「えーっと。遊ぶって言うのは……あー、いいや！　とりあえず、そっから出て来いよ」

僕は首を振る。だって、出て来いっていうのは境界線を越えろってことでしょう？　僕はこの部屋から出ることを、おかあさんに許されていない。絶対に外に出ちゃダメよ。何回も言われたことだ。窓から手を出すことだってしない。出してしまったら、そこから腕が消えちゃいそうな気がするから。

「だめ。出る、の、いけない」

必死で外にいる子に伝えようとするけれど、僕の少ない言葉ではおそらく伝わらないだろう。もしかしたら声すら届いていないかもしれない。その子は眉を寄せ顔をしかめると叫びだした。

「あー、もうわかんねえからいいよ！　俺が今からそこまで行くから、待ってろよ」

僕が何か答えるよりも先に、その子は窓の外の世界から消えてしまった。どこへ行ってしまったんだろう。待って、何を？

どんだん。扉の向こうから音が響いた。どうしよう。今まで、おかあさん以外の人があの境界線にやってくることはなかった。僕はただこの部屋で時間を過ごしていればいいだけだった。どうしよう。どうしたら。

「おーい、いるんだろ？　出て来いよ」

さっきの子の声がする。外にいるのは、あの子？　どうしよう、どうしよう。僕は動けない。がちやりと扉の開く音がした。

「なんだ、開いてるじゃん」

誰かが入ってくる。行こうぜ、あの子が言った。僕の目の前に立って。手を差し出される。僕はどうしたらいいのか分からない。腕を引っ張り上げられる。立ち上がって、さらに引っ張られていく。

「え、え、え」

「遊ぼうって言ってんだろ。外で他のやつも待ってるから。行こう」

「え、でも。出るの、ダメ」

「なんでだよ？」

「おかあさん、いけない、って」

心臓がばくばく唸る。開いた眼をとじられない。口もうまく回っているのだろうか、分からない。

「母さん、仕事？」

頷く。

「だったらいいだろ。ばれなきゃいいの」

引っ張られ、引っ張られ、境界線の目の前にきた。僕は、ここを通り抜けていいのか？ もし越えてしまっただけ、消えてしまったりはしないのか？ だって、おかあさんがあれだけ、駄目だって言っていたのに。

引っ張られる。足が動く。靴履けよって言われたから、おかあさんの靴に足をつっ込んだ。扉が近づく。あの子が扉の向こうに出る。ああ、出てしまう。足が扉を越えた。ぶわっと風が打ちつける。海の匂い。こぶん。ギュッと閉じていた眼を開けた。あの子がこっちを見る。

「何してんだよ、お前」

ヘンな奴だな、と言って、また笑った。なんだ、何も変わらない。外も、部屋の中も、何も変わらなかった。僕は出られるんだ。こちらの方が潮の匂いが濃い。こぶんこぶん。

いくぞ、とまた腕を引っ張られる。うすい靴越しに地面を感じる。足が冷たい。けれど、痛くはない。気持ちいい。

「連れてきたぞー」

声を聞いて、僕は前を見た。僕と同じくらいの子がもう一人、目の前に立っていた。

「おそいよ」

「だってこいつなかなか出てこねんだもん」

「あ、あ、あの」

いったい何が起こっているんだ。初めて外に出て浮かれていたけれど、この子たちは、なに？

「俺、そうた。こっちの眼鏡があきら」

「君はなんていうの？」

「な、ナマエ？」

「ああ」

僕の名前なら知っているんじゃないのか？ 少なくともソウタと言うらしい子だけは。

「し、ってる。そうた、が」

「はあ？ おれ、お前の名前なんか知らねえよ」

「それ。オマエ、って。ずっと、言ってる」

僕が何とかこたえようと、みんな変な顔をしてしまった。

「オマエ、が君の名前なの？」

「おかあさん、アナタ、アンタ、オマエ、て言う」

「おかあさん以外は？」

アキラと言う子が聞いてきた。僕は首を振る。

「はなすの、ない」

「じゃあお前、部屋から出たことないのか？」

ソウタの言葉にうなずく。おかあさん以外、あの部屋にはやってこない。ソウタが初めて。

「でも、オマエが名前じゃ呼びにくいね」

「じゃあ俺がつけてやるよ！」

ソウタが急に声をあげて、アキラと話し始めた。何を話し合っているのだろう。難しい顔で話しこんでいる。

「お前、何が好き？」

ソウタが突然聞いてきた。いいものが浮かばなかったらしい。

「……ウミ」

「海が好きなんだ」

「じゃあ、ウミにしようぜ」

一斉にウミ、と呼ばれる。海。ウミ。僕の新しいナマエ。

「じゃあ、一緒に遊ぼう、ウミ」

アキラが声をかけてきた。またアソブ。だからアソブって何。

「なに、する、の」

「なんでもいいんだよ、楽しければ」

「そうそう。ただ走り回るだけでも。ここは公園だから、なんでもできるよ」

「なんでも……？」

考えてたら、また腕を引っ張られた。二人と一緒に走る。何度も躓いて転びそうになった。笑われたけど、僕も笑っていた。皆が笑ってたから、僕も楽しかった。そうか、アソブって、楽しいことな

んだ。

どこから持ってきたボールを投げ合ったり、高いところから滑ったりもした。いつの間にか高い所にあった光が朱くなりだした。そろそろおかあさんが帰ってくる。帰るか、とソウタが言った。

「じゃあ、ウミ。またね」

アキラが手を振って言う。あ、そうだ。

「ね、マタネって、なに」

二人が帰ってしまう前に尋ねる。ソウタはなんか言いかけて黙り込んでしまった。代わりにアキラが答えてくれる。

「今度、次にも会おうって、別れるときの挨拶だよ。さよなら、バイバイと一緒に」

マタネと言うのは再会の約束らしい。そうか、と頷いて、その言葉の感触を確かめた。マタネ、と何度も口の中で呟く。もう一度頷いて、マタネ、と言おうとした。口を開いた。

「何してるの!」

僕の声よりも先に、甲高い悲鳴が響いた。慌てて振り返る。おかあさん、つぶやいた言葉に、音は伴わなかった。

「出ちゃダメって言ったでしょう! 聞いていなかったの? 早く戻りなさい!」

すごい勢いでおかあさんが向かってくる。僕は動けない。ただ、

黒くてよく見えないお母さんの顔をじっと見ていた。パンツと頬つぺたをはたかれる。その音は耳に痛く、いつまでも響いた。

「あなたたちも！」

おかあさんが二人に向かって叫ぶ。二人はびくつと身をすくめた。

「この子のこと、誰にも言うんじゃないわよ！ 今日は何もなかったの。誰とも会わなかった。いい？」

二人は頷かない。と言うよりは、頷けないようだった。おびえた様子で後ずさり、身を寄せ合う。

おかあさんはギツと二人を睨むと、強く僕の腕を握った。ぎりぎりと骨が軋むようだった。振り返る。二人はまだそこにいて、僕をじっと見ていた。ゆる、と小さく手を振る。見よう見まねだけれど、ちゃんとできているだろうか。さよなら。声には出さずに呟いた。ふたりは小さく手をあげる。悲しそうな顔をしていた。誰もマタネ、とは言わなかった。

おかあさんに引っ張られて扉をくぐった。初めて外から帰ってきた。ただいま、と言おうとしたけれど、やっぱり何だか違う感じがしたから口をつぐんだ。お母さんも何も言わなかった。

バシン！部屋に入ったとたん、またはたかれた。何度も何度もぶたれて、痛みが麻痺してくる。頬つぺたが痺れる。

「どうしてお前は！ おかあさんを困らせることばかりするの！ お前は！ こんなにも、こんなにも……、私は、マリは！ マリは

頑張ってるのに！」

顔を真っ赤にして涙をぼろぼろ零しながら、マリは僕を殴り続けた。どれだけはたかれたか分からないくらいになってから、マリは僕の頬っぺたと同じくらい赤くなった手で顔を抑え、泣き崩れる。僕は小さく縮こまってしまったマリに近寄り、上から抱きしめた。僕の小さな腕では余ってしまったけれど、別にかまわない。

「ごめん、なさい。マリ。もう、しない。困ること、しない。マリ」

マリはああ、と声を上げた。ごめんなさいごめんなさいと何度も謝る。でもあなたが悪いのよ、おかあさんの言うことを聞かないから。おかあさんも頑張ってるの。そう言って嗚咽をあげる。

「うん。ごめんなさい、おかあさん」

小さな手で背中を撫でたら、いつの間にかおかあさんは眠ってしまった。子供みたいだ。寒そうだったから押入れから布団を引っ張ってきてかけてやる。

ぐうぐうとなるお腹を押さえる。窓辺によりそって僕も寝た。窓の外はもう見ない。

終焉

おかあさんは最近疲れているようだ。僕のことも見なくなってきた。帰ってくるとすぐに敷いたままの布団に寝転んで、僕が声をかける前に眠ってしまう。目の下の黒い部分が大きくなって、痩せかけているようだった。骨の形がよく見える。腕にそっと触れてみたら骨しかないみたいで、ぞっとした。おかあさんってこんなだったっけ。もっとやわらかだった気がする。

そのうちにおかあさんは家からも出なくなった。ぎょろりと飛び出しそうな眼がいつも僕をとらえていて、見張られているようだ。身を固くする。仕事は、と一度聞いたら、たくさん殴られた。頬っぺただけじゃなくて、お腹も、腕も、足も殴られた。おかあさんは何も言わなかった。そのうち、疲れてしまったのか布団にもぐりこんでしまった。

このままだと終わってしまう。何となくそのことを理解していた。何が終わるのか、なんてわからなかったけれど、終わってしまうことはとにかく怖かった。

ぐうぐうとお腹が鳴る。空腹感はどうに消え、飢餓感が苦しみとなって襲い始めていた。何かを作って食べよう。そんなことは初めて考えたけれど、おかあさんの手伝いを何度かしてるから大丈夫だと思った。包丁を持ってから冷蔵庫の中をのぞく。だけど、中には何にも入ってなかった。冷たくもない。火も付けてみようとしたけど、つかなかった。しかたないから諦めて、そのままおかあさんの隣に膝を抱えて座った。

ブツブツとおかあさんが何か喋りだす。僕がおかあさんに目を向けたら、おかあさんも僕を見ていた。またブツブツと何か言っ、急に起き上がった。驚いて顔をあげた僕の首におかあさんの手がかかる。息が詰まる。嫌だ。嫌だ。終わらされるのは嫌だ！

「お前なんか生まれてこなければよかったのに」

おかあさんが言った。ぎらぎらと目が光る。

「僕も、生まれたとき、そう、思ってたんだよ」

途切れそうになる息で必死に声を出す。同時に手を突き出した。料理をしようとして、包丁を持ったままの手を。

おかあさんの身体が倒れこむ。僕の身体もそれに合わせておかあさんの上にのしかかった。

ぴくぴくと震えた後、おかあさんの動きが止まった。手が赤い。服も、もしかしたら顔もそうかもしれない。赤くて、黒かった。

でもね、生まれてよかったとも、確かに思ってたんだ。知らないでしよう。

そつと真っ白なおかあさんの頬っぺたを撫で、呟く。もう、届かないけれど。

外へ出よう、と思った。もう僕は外に出られることを知っている。止める人も、お母さんも、マリも、もういない。

僕の足には大きすぎる靴をはく。かぽかぽと音を立てる靴を気にせず、扉をあけて外に出た。風を感じる。濃い潮の香りが身体を包む。僕はどこを目指すでもなく、ふらふらと足を進めた。

「あれ、ウミ？」

声がかかって、そちらを見る。アキラがいた。横に何かを立たせて、一部を握っている。

「……大丈夫？」

振り返った僕を見たアキラは心底驚いたように目を丸くする。少しだけ怯えが混じっていたのは気のせいではないだろう。

アキラの問いに僕は頷く。大丈夫、と聞かれたら頷かなければいけないから。それに、アキラはたぶん、お母さんのことを心配しているのだろう。もしかしたらこの格好のせいかもしれない。前者ならば問題ないだろう。だって、もういないんだから。後者でも……、アキラが気にすることじゃない。

アキラはそっか、と呟くともう一度僕を見た。そこに怖がっている様子はなかったので、僕は少しだけ安堵する。

「どこに……行くの？」

「……ウミ」

聞かれて、そう答えていた。そうだ。僕は海に行きたい。

「海？ 歩いて行くと、ちょっと遠いよ。僕の自転車に乗る？ 連れてったげるよ」

アキラの横にあるものはジテンシャと言うらしい。僕は頷いた。場所もよく分からなかったから、連れて行ってくれるというのなら助かる。

アキラの後ろに座る。よいしょ、とアキラが声を出すと、ジテンシャは前に進みだした。歩くよりもずっと早い。風がびゅんびゅん流れていく。塩の匂いが濃くなっていく。

「はい。着いたよ」

しばらくしてアキラがジテンシャを止めた。
ザザン…ザザン…と潮騒が耳を打つ。

「これが…ウミ」

「ここね、僕ら子供しか来ない所なんだ。岩が多いけど、綺麗ですよ？」

自慢げにアキラが言う。確かにそれは、とても美しい光景だった。沈みかけた光が揺れる海面に反射して、眼がきらきらでいっぱいになる。足が自然に動いた。あれに触れたい。

そうだ、とアキラが声を上げた。

「そうだが今うちに遊びに来てるんだ。すぐそこだから、呼んでくる。待ってて」

海に背を向けてアキラは走りだす。僕はその間も止まることなく海に向かっていった。

「あ、そうだ。ウミ…」

アキラが振り返って僕に何か言おうとした。けれど僕はそのときすでに海のすぐそばの岩の上まで来ていた。おそらくアキラには見えなかったのだろう。何度も僕を呼ぶ声が聞こえる。僕は振り返って、アキラを見る。アキラも僕を見つけた。危ない、とアキラの口が動いた。僕は微笑う。

「ありがとう。さよなら」

届くはずのない呟き。けれど、アキラははっとしたように動きを止めた。マタネって、また使えなかったな。せっかく教えてもらっ

たのに。

地面を蹴る。身体が浮く。目の前に水面が映る。ごぷり。水が揺れた。

ごぼごぼと空気が抜けていく。最初こそその空気を追い求めていたが、海水が肺を満たし始めてからはそれもやめた。冷たい、思っていた海水も、外の空気に比べれば暖かいものだ。懐かしい感覚。満たされていく。身体を丸める。このほうが楽で、自然だ。体中にはびこっていた空気が抜けきった。苦しくはない。むしろ待ち望んでいた姿だ。己の帰るべき場所はここだったのか、と今更ながらに気づく。

先ほどまでごうごうと激しく唸っていた海水が、ごぷごぷとたゆたうようになった。巻き戻されているようだと思った。揺れる水とともに己の体も揺れる。

戻っていく。己の望んだ世界に。

肺の中を海水が行き来する。意味のない動きを繰り返す。感覚が鈍い。手足を少し動かしてみる。何かが喜ぶ声が聞こえた。柔らかく包まれる。小さく小さくなっていく。

一度だけまぶたを開く。深く蒼い水面が見えた。光はもういなくなってしまうのか、それでもかすかに光っている。

ゆっくりとまぶたを閉じる。ごぷん、ごぷん。ようやく帰ってこれたんだ。ただいま。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2381m/>

おなかのなか

2010年10月28日04時18分発行